

【研究論文】「米軍基地文化」研究の動向と展望

山出 裕子

日本大学大学院総合社会情報研究科後期課程

Trends and Prospects of Studies on American Base Culture in Japan

YAMADE Yuko

Graduate Student at the Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

Recently, cultural hybridity in Japanese society has become an important topic in various academic fields. Subsequently, we have seen research emerging about the hybrid culture surrounding American military bases in Japan, which can be referred to as “American Base Culture.” In this article, I aim to review the research on “American Base Culture,” particularly focusing on its literature and linguistic contact. Following that, I will explore its prospects.

1. はじめに

現在、日本国内には、およそ 300 万人の外国人が滞在しており、過去最高の数となっている¹。これは、日本社会の国際化が進んでいることを意味していると考えられ、それに伴い、国内での「異文化交流」や「文化接触」に関する研究が多く見られるようになってきている²。これらの研究では、大都市やその近郊地域、または、外国人労働者が多く滞在する地方都市の工業地帯周辺や外国人集住地域などを対象としたものが中心である。これらに加え、外国文化との文化接触がおこる地域として、日本各地に見られる米軍基地周辺地域もあげられる。在日米軍基地は、第 2 次大戦後に日本各地に置かれたものであるが、米軍基地周辺地域の文化が「米軍基地文化」として、一つの研究分野となったのは比較的最近である。この背景としては、以上のような「異文化交流」や「文化接触」に関する研究が進み、日本文化の混雑性に対する認識が変化していることが考えられる。本論では、近年研究分野の一つとして研究が進められている「米軍基地周辺文化」に関する研究について、特に「文学」と「言語接触」の側面から先行研究をまとめ、今後の展望について本論著者の見解を述べる

こととする。

2. 「米軍基地文化」研究の動向

「米軍基地文化」に関する代表的な研究としては、難波 (2014) がある。ここでは、沖縄県内の基地やキャンプ、東京都の横田基地、神奈川県横須賀基地、長崎県の佐世保基地などの周辺に形成された、あるいは現在も形成されている文化的特徴について様々な側面から検討がなされている³。大山 (2014) や木本 (2014) では、横須賀、横田、沖縄、さらにはフィリピンの米軍基地周辺に見られる音楽文化 (ジャズ、歌謡、ロックなど) について論じている。特に、木本 (2014) は、音楽文化だけでなく、横田基地周辺に見られたサブカルチャーの研究にも言及している。また、青木 (2013) では、「米軍基地と日本」に関する研究はすでに多くなされてきたものの、日本を訪れた米軍関係者の個人的な体験についての研究がなされていない、との考えから、米軍関係者の個人的体験について、特に音楽に関する経験を明らかにすることで、「先行研究の欠落を補う仕事」を行っている、としている (pp.44-45)。

山崎 (2005) や新井 (2014) は、地理文化学的側面

から、米軍基地周辺文化についての研究を行っている。具体的には、山崎 (2005) は、沖縄県の軍用基地の接収と社会運動について検討し、新井 (2014) は、地域文化的かつ地域経済的側面から、東京都の横田基地周辺文化に関する研究を行っている。特に新井 (2014) では「特定の基地所在都市の経済・文化・政治過程」を記述することで、「ローカルな政治的・経済的主体による『場所の政治』を明らかにする」(p.769) としている。このような視点は、Painter (1995) の言う「人文地理学における文化論的転向 ('cultural turn' in [human] geography)」(p.2) を踏まえたものである。そして、これまでの地理学の研究が、政治学や物質的・言説的な社会的実践により作り出されるものを中心としたものであったのに対し、この新たな視点は「文化・メディア・言説といった非物質的過程にも着目するものである」(p.770) としている。これはまた、バージェス・ゴールド (1992) や Mitchel (2000) の論じる「新しい文化地理学」の特徴であるとし、この新たな研究視点は「小説・新聞・音楽といったさまざまなメディアによる場所イメージの形成を論じるものである」(p.770) としている。そのため、新井 (2014) では、横田基地の周辺文化を「現象」として捉え、公的に編纂された歴史書だけでなく、地元新聞、ルポルタージュ、福生市を舞台にした小説、雑誌記事といった複数のテキストを用い、この地域の文化的特徴について分析している。

3. 米軍基地周辺を描いた文学研究の動向

以上のように、一定の地域の文化的特徴を「現象」として捉えた場合、その地域を舞台として描かれた文学作品もまた、その研究対象とすることが可能であることは、以上の先行研究からも明らかである。米軍基地周辺の文化を題材とした文学作品を「基地文学」とし、これを研究したものとしては、河原崎 (2011) があげられる。これは、フィリピンにおける米軍基地を題材とした文学作品について考察したものである。また、小林 (2011) では、「基地文学」として、韓国、フィリピン、日系の作家について調査した報告がまとめられている。

先にあげた新井 (2014) や木本 (2014) では、横田

基地周辺文化を題材とした村上龍による『限りなく透明に近いブルー』(1976) について論じている。いずれの論考も村上の作品を「基地文学」とは定義していないが、これが米軍基地周辺に見られる米国と日本の文化が混淆した状況を描いた作品であることから、これを河原崎 (2011) や小林 (2011) の論じる「基地文学」として扱うことは可能であると考えられる。特に、新井 (2014) では、この作品の舞台となった横田基地周辺に建設された「米軍ハウス」⁴や同地域に形成された快樂街の背景にも言及し、この小説における「出来事の多くは、福生市内のハウスや快樂街内と推測されるクラブなどで行われた」(p.776) とし、この作品が実際の横田基地の周辺文化を表象している、としている。そして、同作品が同年の芥川賞を受賞したことを機に、横田基地周辺に形成された混淆文化がマスメディアで取り上げられるようになった、と指摘している。さらに新井 (1994) では、1988年から2001年にかけての「国道16号線拡幅後における赤線・ハウス・横田基地前商店街に関する雑誌記事一覧」(p.781) が掲載されている。ここでは『宝島』『Hanako』『Tokyo Walker』といった当時の若者向けの情報誌で、複数回にわたり「横田基地周辺文化」が特集されたことが報告されている (pp.781-782)。

4. 言語接触研究の動向

これまでに行われた日本語を含む言語接触に関する研究としては、まず、明治期の横浜地域でみられた「横浜ピジン (pidgin)」⁵に関するものがあげられる。さらに近年では、ロング (2002; 2007; 2010) を中心に、東京都の小笠原諸島や沖縄県の奄美大島などの言語接触に関する研究が報告されている。

一方で、Maher (2004) では、日本で起こった、またはこれから起こりうる「ピジン・クレオール」として、「港ピジン」(16世紀の長崎における日本語とスペイン語の言語接触)、「出稼ぎピジン」(1980年代以降の出稼ぎ労働者による日本語と外国語の言語接触)、「軍事基地ピジン」(世界中で見られる英語と現地語の言語接触)などをあげている (p.173)。このうち、「軍事基地ピジン」の国内の例として、「浜松ピ

ジン」があげられており、自身が東京西部の基地周辺に住むアメリカ人と話した際に、『浜松ピジン』に見られるような特徴をもった日本語を話すのを耳にした」(p.178)としている。

以上のように、国内の米軍基地周辺における日英言語接触については、「軍事基地ピジン」としてある種の特徴を有していることが指摘されている。その中でも特に「浜松ピジン」に関しての研究は、すでにいくらか見られている。その例としては、*Anthropological Linguistics* に掲載された Goodman (1967) “The Development of Dialect of English-Japanese Pidgin.” があげられる。Goodman は米空軍技術大学に属していた研究者であり、1945年に、静岡県浜松市に浜松自衛隊空軍基地が設置された際に来日している。そして、アメリカ空軍兵の一団が指導のために浜松に来日し、日本語と英語の言語接触が起こったことを指摘し、実際にそこで話されていた言語を “English-Japanese Pidgin” (p.43) として紹介している。Goodman (1967) によれば、浜松に派遣されたアメリカ人兵士たちは、日本語を学んだこともないまま浜松郊外に住み、浜松に住む日本人も英語を話した経験がなかったことから、浜松の空軍基地周辺で、アメリカ人兵士が周辺地域に住む日本人とコミュニケーションをとる際には、必然的にピジンが話されていたとし、これを “E-J Pidgin” (p.44) としている。同論文では、“E-J Pidgin” (浜松基地周辺で話されていたピジン) の例として、“watash” (「わたし」の最後の母音が落ちたもの)、“taksan” (「たくさん」の母音の一つが落ちたもの)、“nay” (「文末の「～ね」を英語風に発音したもの)、“skoshi” (「すこし」の最初の母音が落ちたもの) などの例をあげている。これらは、日本語の語彙を英語母語話者が発音した場合に発音の差異が生じたものである。ここでは、このような言語接触によって新たな発音で話された日本語を “E-J Pidgin” の例として紹介している (pp.48-49)。さらに “E-J Pidgin” が発達した分野として「貿易、娯楽、一時的な住居、スポーツ、外交、仕事」(p.50) をあげ、これらを東京や名古屋などの大都市で発達したものと比較し、「浜松の基地周辺では特に『外交』と『仕事』」(p.50) に関して “E-J Pidgin” が発達したとしている。その理由としては、「浜松の米軍施設が

(地理的に) 孤立した状態であったため」(p.50) としている。そして、この2つの分野でピジンが発達したことは、浜松における “E-J Pidgin” を「豊かにしている」(p.50) としている。

さらに、「言語接触」による「言語環境」への影響の一つとして、近年、国内外で「言語景観」に関する研究が進められている。「言語景観」とは、英語の “Linguistic Landscape” の和訳であり、「公共空間で目にする書き言葉」(庄司他 2009 p.9) と定義されている。一方で、以前から「公共空間で目にする書き言葉」の研究はなされており、1970年代には正井 (1972) が東京に見られた看板を収集し、考察を加えている。1990年代には、梶田 (1994)、宮島 (1995) らが、国内の多言語表記の標識や看板に関する研究を行っている。そして、1997年にカナダの社会言語学者 R. Landry と R.Y. Bourhis が「特定の領域あるいは地域の公共的・商業的表示における言語の可視性と顕著性」(p.23) について研究したものを “Linguistic Landscape” と定義したことで、これが「一つの学術分野」とみなされるようになった、とされている。ロング・斎藤 (2022) では、「言語景観」という研究は「日本の社会言語学にとっては非常に新しい分野である」(p.11) とし、「言語景観」が学術的分野になったのは1990年以降であり、さらに日本において、「公共空間での書き言葉」が「言語景観」として研究が進められるようになったのは、2000年以降である、としている。そして、この頃から、国内の「言語景観」に関する研究が盛んになり、現在に至る (例として、庄司 2019; ロング・斎藤 2022 など)。

近年の国内における言語景観に関する研究としては、「多言語化」ならびに「多民族化」に関するものが多く見られる。また、最近では、東京や大阪などの大都市ばかりでなく、地方都市の外国人集住地区に関する研究が多く見られるようになっている。国内の外国人集住地区に関する研究では、その地区 (エスニックコミュニティ) により多く住むエスニシティや彼らの話す言語が、その地域ならではの景観を形成することが明らかにされている (斎藤 2015; 斎藤・志喜屋 2015)。また、国内において外国人住人が多く見られる地域としては、米軍基地周辺もその一つであり、今村・塚原 (2014) では、米軍基地やキ

キャンプ周辺の言語景観について、神奈川県横須賀市、東京都福生市、沖縄県那覇市および金武町を例に、比較研究を行っている。ここで対象としているのは、海軍（横須賀）、空軍（福生市、那覇市）、陸軍（金武町）であり、それぞれの地域の歴史を概観した後で、米軍施設周辺の言語景観を比較している。

5. 「米軍基地文化」研究の今後の展望

以上、近年見られる「米軍基地文化」の研究について、特に2つの側面に関する先行研究を概観した。以下では、以上の考察から見えてきた当該研究の今後の展望について検討する。

5.1 米軍基地周辺を描いた文学研究—「基地文学」を視座に

米軍基地周辺に広がる文化や環境を描いた文学は、国内外を問わず、これまでも見られてきた（河原崎 2011、小林 2011 など）。国外においては主にフィリピンの米軍基地周辺をテーマとした作品が見られ、それらは「基地文学」(Base Literature) として研究されてきた（河原崎 2011; 小林 2011）。しかしながら、フィリピンにおける米軍基地の閉鎖とともに、「基地文学」の特徴を持つ作品が見られなくなり、現在ではフィリピン文学においても「基地文学」に関する研究はあまり見受けられなくなっている。

国内においては、米軍基地が日本の各地に点在している状況であるが、沖縄県以外では米軍基地周辺の文化を描いた作品はあまり多くみられていない。一方で、沖縄県の米軍基地周辺を描いた作品は、占領下時代から見られていたものの、基地周辺を舞台とした文学作品が日本において権威があるとされる文学賞を受賞した例は、あまり見られなかったが⁶、特に2010年代以降、沖縄県の米軍基地周辺を舞台とした作品が直木賞や芥川賞などを受賞している⁷。この背景として、日本社会の国際化により、米軍基地周辺に存在する混淆文化が現在の日本文化の一つの形として捉えられ、影響を与えていることが認識されるようになったためであると考えられる。そのため、以上にあげたような沖縄県の米軍基地との関係性を描いた作品が、近年の日本を代表するような文

学賞を受賞していることは、強調されるべきであろう。このことはまた、沖縄文化にとっては「異文化」である米軍基地が、現地の人々との関わり合いから、同地域に文化的特徴を創り出し、作品に付加価値を与えている、と考えられる。そのため、米軍基地という異文化の存在があることで、それがどのような関わり合いであるにせよ、沖縄の文学に特徴を付与する一つの要素となっていることは注目すべきであろう。

一方で、新井 (2014) でも言及されているように、地域文化を検討する際に、研究対象となる可能性があるメディアとしては「地元新聞、ルポルタージュ、小説、雑誌記事」(p.771) もあげられる。また、近年の「文学」研究では、「小説・詩・戯曲」といったような従来の表現形式だけでなく、大衆小説、映画、ノンフィクションなども文学作品と捉えられる。

例えば、神奈川県横須賀地域に置かれる在日米海軍基地周辺を描いた作品として、ノンフィクション作品である藤原晃による『ヨコスカどぶ板物語』(1991) とその続編である『横須賀どぶ板繁盛記』(1995) があげられる。また、大衆(推理)小説として、東野 (2008) 『流星の絆』や、映画作品として今村 (1961) 『豚と軍艦』がすでに見られている。これらの作品は、横須賀基地周辺にある繁華街である「どぶ板通り」を舞台としており、村上 (1972) の小説に見られたような、日米が混じり合った「混沌とした」文化が描かれている。こうして「文学」というジャンルを捉え直すことにより、これまでに見逃されてきた文学作品の価値を再評価することが可能となるであろう。そのため、米軍基地周辺を描いたより広い形式の作品を文学研究の対象とすることで、「米軍基地文学」を文学研究の一つの分野として確立していくことは可能であろう。それはまた、日本国内で見逃されている文学作品に光を当て、さらに日本社会の国際化に関するもう一つの研究分野を提供する可能性を含んでおり、今後、注目していくべき側面であると考えられる。

5.2 言語接触研究

これまでの国内での言語接触に関する研究としては、19世紀末の日本の開国以降、横浜を中心に日

米の文化接触が起こっていたことから、それに伴う「日英ピジン」(“E-J Pidgin”)をはじめとした研究が1960年代から見られてきた。近年に至っても、この時代の文献 (*Exercise in the Yokohama Dialect*) に関する研究が日本国内の言語接触 (日英ピジン) の主だった研究であるといえる (Daniel 1948; Norman 1955; カイザー 1998, 2005; ロング 1999; 大川 2017; 西沢 2020 など)。

一方で、Maher (2004) では、国内における「ピジン・クレオール」を分類し、そのうちの一つである「軍事基地ピジン」については、「世界中で見られる」(p.175) としている。実際、現在でも日本各地に米軍基地が点在しており、それぞれの基地周辺では「軍事基地ピジン」が存在していると考えられるが、国内における「軍事(または米軍)基地ピジン」の体系的な研究はこれまでになされていない。現在の在日米軍基地は、先にあげた、東京都の横田基地(空軍)、神奈川県横須賀基地(海軍)、長崎県の佐世保基地(海軍)、沖縄県内の基地(空軍や海軍など)だけでなく、青森県の三沢基地(空軍)や山口県の岩国基地(空軍)など、それぞれ特徴的な日本語方言が話される地域に置かれている。そのため、これらの地域で行われる言語接触に関して調査を行うことは、言語接触による日本語の変容を調査していくうえで、非常に興味深いと考えられる。先の Goodman (1967) も、基地周辺の言語接触について、「大都市部の言語接触によるピジンと比べ、基地周辺のピジンは、大都市のそれとは異なる分野で発達する」(p.50) としており、これは「日英ピジンを豊かにしている」(p.50) としている。このことから、日本各地の「米軍基地周辺」でおこる言語接触による「日英ピジン」の体系的な研究を行うことは、今後のこの分野の研究発展に寄与することが考えられる。

言語接触が地域に与える影響の一つとしては、言語景観があげられる。というのは、言語接触によりその地域で話される言語に変化が起こった際には、同地域の言語環境にもその影響が見られるためである。特に、米軍基地周辺では、他の地域と比べると英語を用いた言語景観が特徴となるのは、先の先行研究でも指摘されている。しかしながら、「米軍基地周辺」と言っても、実際には、海軍(長崎県佐世保市、

神奈川県横須賀市など)、空軍(東京都山口県岩国市、東京都福生市など)、陸軍(神奈川県相模原市など)のそれぞれで、基地内の施設や所属する米軍人の数などが大きく異なるため、周辺地域に与える影響もまた一概ではないことは強調されるべきである。例えば、沖縄県、東京都、神奈川県、ではそれぞれ自治体レベルでの基地受け入れに対する態度は異なり(木本 2014)、在日米海軍と空軍では、配属される米軍人の背景、人数なども異なる(熊本 2014)。このことから、米軍基地周辺に作られるコミュニティに対する影響力に違いがあることは明らかであり、これらを比較することは慎重にすべきであろう。また、先に述べたように、これらの地域では、周辺住民との関係も大きく異なることから、米軍基地周辺文化の比較をする際には、単に表象として比較を行うのではなく、その歴史的背景を十分に検証し、周辺地域の関係者に対する調査も行う必要があると思われる。

例えば、先にあげたような横田基地周辺の「米軍ハウス」は近年、姿を消しつつあり、本論著者が現地調査を行った際(2023年3月)には、かつて「米軍ハウス」があった敷地の多くには、日本人向けの新築住宅が建てられており、現在も「米軍ハウス」という特徴的な建物のままである場合は、観光客向けの施設や飲食店として使われているものが多く見られた⁸。これは沖縄県の浦添市でも同じ状況であり、かつて「港川ステイツサイドタウン」と呼ばれた、米軍基地関係者向けの賃貸住宅が建てられていた一帯では、かつての「米軍ハウス」の多くが観光客向けの店舗や飲食店として使われている⁹。一方で、横須賀基地周辺には「米軍ハウス」は見られないものの「どぶ板通り」周辺は、多くの外国人(主に米軍基地関係者)の姿が見られ、この界隈の住宅の多くでは米軍関係者の車両が見られる。そのため、以上にあげた横田基地や沖縄の基地(嘉手納基地など)周辺の言語景観に比べ、横須賀基地周辺の言語景観には、英語を用いた表記が多くみられている¹⁰。これは、同じ米軍基地でも空軍関係施設と海軍関係施設では、基地内に従事する関係者の数が大きく異なることや、基地と周辺住民との関係性など様々な要素が言語景観に影響を与えているためであると考えら

れる。このことから、米軍基地周辺の文化や言語景観を比較する際には、これらの様々な要素を念頭に置く必要があると思われる。

6. おわりに

本論では、近年研究が進められている「米軍基地文化」に関して、「文学」「言語接触」に関する先行研究をまとめ、それぞれの分野における今後の展望について本論著者の見解を述べた。「文学」に関しては、これまでの作品の多くが「文化接触」や「文化の混雑性」という視点から評価されてきていないがゆえに、その文学的価値が見逃されてきたものがあることを指摘した。「言語接触」に関しては、米軍基地周辺では、「日英語」の接触が行われてきた歴史があるにもかかわらず、その体系的な研究が進んでいないこと、さらに、「言語接触」が「言語環境」に与える影響の一つとしての「言語景観」に関する研究調査では、「外観的」な側面だけでなく、それぞれの基地の背景や周辺地域との関係性を考慮する必要があることを指摘した。

日本社会の国際化に伴い、従来の日本文化は変化せざるを得ない状況にある。それを肯定的に、日本文化の「変容」として捉えた際に、日本各地に点在する米軍基地の影響によって生み出された、あるいは、生み出されている「米軍基地文化」における日本語や日本文化の新たな特徴が見出せるであろう。そして、それらが各研究分野の重要な側面として認識されることで、「米軍基地文化」の研究は、今後ますます発展していくであろうと考えられる。

注

1. 法務省入出国在留管理庁 HP (「令和4年6月末現在における在留外国人数について」) より。
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00028.html (2023年7月1日閲覧)
2. 近年では、「異文化理解」や「異文化コミュニケーション」研究に加え、心理学的側面(例えば、田中(2022)『異文化接触の心理学』)、教育的側面(例えば、佐藤(2019)『多文化社会に生きる子どもの教育』)など、様々な学術分野に特化した研究も見られ、ますます広がりを見せている。

3. 米軍の施設に関しては、通常、空軍(東京都の横田基地など)や海軍(神奈川県横須賀基地、長崎県の佐世保基地など)関連施設は「基地(Base)」と呼ばれ、海兵隊(沖縄県のキャンプ・シュワブなど)や陸軍(神奈川県のキャンプ座間など)関連施設は「キャンプ(Camp)」と呼ばれる。
4. ここでの「米軍ハウス」とは、「アメリカンハウス」とも呼ばれる、米軍関係者用に基地外に建設された平屋建て住宅のことを意味する。
5. ピジンとは、お互いに言語が異なる人々の間で共通のことばとして発生してきたものである。また、クレオールとはピジンが言語システムとして定着し、母語としてその言語を話し、世代間に受け継がれたものを言う(飯野他 2003 pp.130-131)。
6. ここでは「芥川賞」と「直木賞」(ともに1935年に『文芸春秋』創立者の菊池寛により創設された)など、文学賞としての価値が広く認められている賞を指している。
7. 2018年に発表された真藤順丈の『宝島』は同年の第160回直木賞を、2020年に発表された高山羽根子の『首里の馬』は同年の第163回芥川賞を受賞している。
8. 米軍関係者が入居している際は、駐車スペースに米軍関係者向けの車(「Y ナンバー車」)がとめられていることが多いが、2023年3月に行った本論著者の調査では、見受けられなかった。
9. 2022年8月に行った本論著者の現地調査による。また、もともと港川地区には60戸の「米軍ハウス」があったが、現存する57戸のうち43戸が店舗として使われている(「立正大学地球環境科学部 HP」http://rissho-map.jp/month_view/20210106 および「ふるさと Lovers HP」<https://tabi.furu-po.com/article/266> より引用)。
10. 本論著者による現地調査(沖縄県嘉手納基地周辺調査[2022年8月実施]、および、東京都横田基地周辺調査[2023年3月実施])による。

引用文献

【日本語文献】

青木深(2013)『めぐりあうものたちの群像—戦後日本の米軍基地と音楽』大月書店。

- 新井智 (2014) 「東京都福生市における在日米軍横田基地をめぐる場所の政治学」『地学雑誌』1114-5, pp.767-790.
- 飯野公一・恩村由香子・杉田洋・住吉直子 (2003) 『新世代の言語学—社会・文化・人をつなぐもの』くろしお出版.
- 今村圭介・塚原佑紀 (2014) 「米軍基地周辺の街の多言語景観—横須賀市・福生市・沖縄市・金武町を例に—」『日本語研究』34, pp.94-113.
- 今村昌平 (1961) 『豚と軍艦』日活スコープ.
- 大川英明 (2017) 「明治維新時のピジン横浜方言—母音音声転写分析—」『国際関係研究』38-1, pp. 1-8.
- 大山昌彦 (2014) 「ロックンロールの場所—米軍基地から地元へ」、難波『米軍基地文化』pp.79-110.
- カイザー、シュテファン (1998) 「Yokohama Dialect 日本語ベースのピジン」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院 pp.83-106.
- カイザー、シュテファン (2005) 「Exercise in the Yokohama Dialect と横浜ダイアレクト」『日本語の研究』1-1, pp.35-50.
- 梶田孝道 (1994) 『外国人労働者と日本』日本放送出版協会.
- 河原崎やす子 (2011) 「基地文学と越境・混血—フィリピン系アメリカ文学からの論考」『AALA Journal』16, pp.47-57.
- 木本玲一(2014)「地域社会における米軍基地の文化的な意味—「基地の町」福生・横須賀の変遷」、難波『米軍基地文化』pp.151-182.
- 熊本博之 (2014) 「米軍来基地を受け入れる論理—キャンプ・シュワブと辺野古社会の変貌」、難波『米軍基地文化』pp.253-277.
- 小林富久子 (2011) 「アジア系アメリカ「基地文学」の系譜—戦争・記憶・語り」『科学研究費補助金研究成果報告書』(課題番号 20520254: 研究代表者 小林富久子).
- 斎藤敬太 (2015) 「ブラジル人集住地域のリンガフランカー—群馬県大泉町と三重県伊賀市の比較—」『日本語研究』35, pp.43-59.
- 斎藤敬太・志喜屋カロリーナ (2015) 「中南米系外国人集住地域の言語表示における伝達意図の阻害要因」『日本語研究』35, pp.113-123.
- 佐藤郡衛 (2019) 『多文化社会に生きる子どもの教育—外国人の子ども、海外で学ぶ子どもの現状と課題』明石書店.
- 庄司博史他 (2009) 『日本の言語景観』三元社.
- 真藤順丈 (2018) 『宝島』講談社.
- 田中共子 (2022) 『異文化接触の心理学—AUC-GS 学習モデルで学ぶ文化の交差と共存』ナカニシヤ出版.
- 高山羽根子 (2020) 『首里の馬』新潮社.
- 難波功士 (2014) 『叢書 戦争が生み出す社会 III 米軍基地文化』新曜社.
- 西沢雅代 (2020) 「横浜ピジンと起点言語の系譜は似ているか—接触言語文法の数量的分析の試み—」『日本語研究』42, pp.19-32.
- バージェス, J.・ゴールド, J. (1992) 『メディア空間文化論—メディアと大衆文化の地理学』古今書院.
- 東野圭吾 (2008) 『流星の絆』講談社.
- 藤原晃 (1991) 『ヨコスカどぶ板物語』現代書館.
- 藤原晃 (1995) 『横須賀どぶ板繁盛記』神奈川新聞社.
- 正井泰夫 (1972) 『東京の生活地図』時事通信社.
- 宮島達夫 (1995) 「多言語社会への対応—大阪 : 1994年」『阪大日本語研究』1, pp.1-21.
- 村上龍 (1976) 『限りなく透明に近いブルー』講談社.
- 山崎孝史 (2005) 「戦後沖縄における社会運動と投票行動の関係性に関する政治地理学的研究」(平成15年～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 研究報告書).
- ロング、ダニエル (1999) 「地域言語としてのピジン・ジャパニーズ—文献に見られる19世紀開港場の接触言語」『地域言語』11, pp.1-10.
- ロング、ダニエル (2007) 「小笠原諸島に見る言語接触の重層化」『言語』36-9, pp.24-31.
- ロング、ダニエル (2010) 「小笠原諸島の日本語変種」『日本語学』29-14, pp.118-131.
- ロング、ダニエル (2002) 「小笠原における言語接触小史」『小笠原学ことはじめ』pp. 271-312.
- ロング、ダニエル・斎藤敬太 (2022) 『言語景観から考える日本の言語環境—方言・多言語・日本語教育』春風社.

【外国語文献】

- Daniels, F. J. (1948) "The Vocabulary of Japanese Port Lingo." *Bulletin of School of Oriental and African Studies* 12-3/4, pp.805-823.
- Goodman, J. S. (1967) "The Development of Dialect of English : Japanese Pidgin." *Anthropological Linguistics* 9-6, pp.43-55.
- Landry, R. & R.Y. Bourhis (1997) "Linguistic Landscape and Ethnolinguistic Vitality: An Empirical Study." *Journal of Language and Social Psychology* 16-1, pp.23-49.
- Maher, J.C. (2004) "A Brief History of Pidgins and Creoles in Japan." *Educational Studies* 46, pp.173-

185.

- Michael, D. (2000) *Cultural Geography: A Critical Introduction*. London: Blackwell.
- Norman, A. (1955) “Bamboo English; The Japanese Influence upon American speech in Japan.” *American Speech* 30-1, pp.44-48
- Painter, J. (1995) *Politics, Geography and ‘Political Geography’: A Critical Perspective*. London: Hodder Education Publishers.

【Web サイト】

- 防衛省 (2007) 「米軍人等の施設・区域内外居住者の人数について」(全国)(平成 19 年 3 月 31 日時点) <https://honkawa2.sakura.ne.jp/index.html> (2023 年 7 月 1 日閲覧)
- 法務省入出国在留管理庁「令和 4 年 6 月末現在における在留外国人数について」
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00028.html (2023 年 7 月 1 日閲覧)
- ふるさと Lovers HP「個性豊かな店舗がひしめく『港川ステイツサイドタウン』」<https://tabi.furu-po.com/article/266> (2023 年 7 月 1 日閲覧)
- 立正大学地球環境科学部地理学科 HP「沖縄県浦添市港川の外人住宅街」http://rissho-map.jp/month_view/20210106 (2023 年 7 月 1 日閲覧)

(Received: August 20, 2023)

(Issued in internet Edition: September 1, 2023)